

（翻訳） 木曜島¹の音楽

— トレス海峡における音楽と日本人コミュニティ（1890-1941） —

（原著題名、執筆者名、掲載誌情報）

'Mokuyo-to no ongaku : Music and The Japanese Community in The Torres Strait (1890 - 1941)'

Philip Hayward and Junko Konishi

Perfect Beat 2001, 5 - 3 : 46 - 65

小 西 潤 子

Junko KONISHI

（平成15年10月1日受理）

序

本稿は、1890年代から1941年にかけて、トレス海峡木曜島に在住ないし就労した日本人コミュニティ²の音楽文化についての報告である。トレス海峡で多くの日本人が就労した水産業に関する詳細は、久原（1954, 1977）、小川（1976）、Ganter（1988, 1944）による研究があるが、日本人コミュニティの社会的・文化的側面については、ほとんど記録や論評がなされていない。これを受けて、本研究では木曜島の新聞 *The Torres Strait Pilot* の記事を第一次資料とし³、二次的資料として他の出版物⁴、口承の歴史については1999年11月から12月にかけて和歌山県（日本）で筆者らが行ったインタビューでの情報を引用する⁵。

本研究の対象期間は、木曜島における日本人コミュニティに関する最初の記録報告に始まり、1941年の太平洋戦争勃発（日本在住者と契約労働者が〔訳注：オーストラリアに〕 抑留され、反日感情が中断した後に日本に送還された年）に終わるものである。本稿は、略史紹介による導入部に続く3つの部分に分かれる。第1の部分では、1890年から1905年にかけての木曜島における日本人コミュニティの発展と彼らの大衆文化への参加について記述する。第2番目は、日本人居住者と就労者内部の文化に関するものである。第3番目には日本人とトレス海峡島民間の文化的関与の局面について述べる。

（N.B. IIIとIVの部分で用いたインタビューからの引用は、「1999年のインタビューによる」と本文中に示した）。

I. トレス海峡への日本人参入の脈絡

歴史的な記録には、日本漁船が14世紀から17世紀初期にかけて、ミクロネシア、インドネシア、メラネシアの水産資源を利用したことが示されている。この時期に、日本人がオーストラリア北東海岸部に渡航したことを示唆する報告もあり (Reid 1954:2)、また日本人実業家の山田長政が1628年から1633年の間にトレス海峡を訪れたことで、この地域の真珠貝資源について知れ渡り、ケープ・ヨーク半島近くまで上陸した一団もいたと述べられている (Lack 1960:19)。こうした歴史にもかかわらず、日本人のオーストラリアーメラネシア海域における探検と交易は、一連の将軍からのお触れによって1630年代末までには途絶え、欧州列強との接触から孤立し、その後にアジア太平洋地域における帝国の基礎を築き始めたのである (Frei 1991: 17)。1853年マシュー・ペリー提督率いる米国海軍による東京湾侵攻(とその結果の条約批准)までの続く200年間、日本は大規模な鎖国状態にあった⁶。1868年に始まる明治初期、外国との接触に対する制限が撤廃され、その直後に日本国民は海外渡航と就労を開始した⁷。

ケープ・ヨーク半島北端のサマセットにおかれたクイーンズランド州政府トレス海峡事務局は、1877年木曜島(ワイベネ)に移管された⁸。木曜島は、行政事務所設立に続いて次第にさまざまな真珠貝採取操業基地として使われるようになり、トレス海峡を通過する国際的船舶の定期寄港地となった。日本人初の木曜島居住者は、島根県広瀬町出身の野波小次郎という水夫だとされる。1878年シドニーで乗組員を解雇された野波は、木曜島に渡航した⁹ (Frei 1991:48)。野波は、トレス海峡到着の後に真珠貝採取潜水夫の職を得て、成功したと知られている。彼の例に続いて、他の解雇された日本人水夫たちが木曜島に渡航し、潜水業に従事してその能力と信頼性を証明した。1880年代半ばまでには、まだ民族的に多様な労働者の溜まり場となっていた木曜島に少数とはいえ90人ほどの日本人潜水夫が滞在し、重要な集団を形成していた (Ganter 1994:101)。日本人居住者たちは、新しい居住地の名称を英語名の文字通りの翻訳である「木曜島」とした。

II. 存在と忠誠 (1890-1905)

こうした木曜島における日本国民の境遇は、1890年代にオーストラリアの海事会社バーンズ・フィリップが日本の仲介業者と提携し、日本から直接(また日本人水夫がしばしば解雇された香港やシンガポールの港から)トレス海峡の真珠貝産業に勧誘するようになったことで明らかに変化した。日本人の木曜島に対する商業的関心は、そこを北東オーストラリアにおける商取引拡大のための戦略的要地と見なしたからでもあった。結果的に、その10年間に潜水夫、カラユキサン¹⁰、商売人やその家族として木曜島に移住した日本人の存在は劇的に拡大した。この急速に増加した新来島者たちは、(非公式に)日本企業と政治家の協議により1893年に設立された「日本人倶楽部」で管理された¹¹。

1893年から1901年にかけての木曜島における日本人コミュニティで、一般に認められていた指導者が佐藤寅次郎¹²であった。多くの日本人が田舎での貧困とわずかな機会から逃れるためトレス海峡に雇用を求めたのとは異なり、佐藤は国際的に認知された明治期日本を具現する人物であった。横浜の貿易会社の番頭として雇用された後、彼は1880年代半ばに海外渡航し、ミシガン大学で法学士を取得した。帰国後、和歌山県出身の女性と結婚し¹³、彼女の出身地である古座川町に移住した。そこでの居

住の間に、彼は〔訳注：和歌山県出身の〕陸奥宗光外務大臣にトレス海峡における日本貿易の発展可能性を管理査定するにふさわしい人物と見なされた¹⁴。この「委託」を受け入れた佐藤は、1893年木曜島に渡航した。到着とともに、彼は「ヨーロッパ、中国、日本、南洋の植民地」¹⁵から直接商品を輸入する「商人かつ総販売人」の地位を築き、事業によって相当の富を蓄積した。

佐藤が到着した頃、木曜島在住の日本人は500人あまりで¹⁶、そのおよそ半数が和歌山県出身者¹⁷であった（服部 1894:20-21）。和歌山県出身者が相当の割合を占めたことについては、論じるに値する。和歌山県の海岸べりの地域は、20世紀半ばまで（ずっと遠い東京はともかく）最近隣の大都市である大阪まで接続する道路や鉄道がなく孤立していた。そのことで、クリフォード（1997）がいう「孤立と接続の（同時的な）パラドックス」を示す事例となったのである。1853年ペリー提督の東京湾到来により日本の鎖国は急速に終結したのに対し、和歌山県ではそれに62年ほど先立って、日本人とアメリカからの訪問船との最初の接触が行われた。すなわち、ボストンの商船レディ・ワシントン号が紀伊半島の和歌山県最南東に停泊し、地元の人々とラッコの毛皮商取引を企てた（が失敗した）のである。商取引に至らないまま35日後出港したにもかかわらず、ケンドリック船長は好意的に受け入れられたことを記しており、またそれは地元の記憶としても伝承されている¹⁸。

1870年代の海外渡航制限解除とともに、和歌山県の漁村の若者は、即座に渡航機会と海外就労がもたらす経済発展の可能性を掴んだ。ガンターの要約によれば、

これらの村民にとって、移住先として東京は木曜島よりずっと遠かった。東京へも海外へも行ったことのない17歳の若者にとって、その距離は単に概念的にしか理解されなかった。ある村の人々は、限られた雇用機会と貧困から逃れるためアメリカやブラジルに向かったが、いくつかの村では機会がありさえすれば、より冒険的な木曜島に行くことが当然ようになっていた（Ganter 1994:119）。

1897年までの和歌山県および愛媛県出身の新来島者によって、木曜島在住の日本人数（一時滞在や半永住者を含む）はおよそ1,000人にまで増大した。そのことで日本人の割合は、ヨーロッパ系オーストラリア人に対しておよそ2:1、他の民族集団（トレス海峡原住民、アボリジニ、フィリピン人、マレー人、中国人）に対してはずっと大きい、最大の民族集団を形成するに至った¹⁹（Ganter 1994:105）。オーストラリア領地内では外国人であった日本人在住者は、地元政府の制度と雇用から排除され、独自の社会的経済的的制度と構造基盤をもつ分断されたコミュニティとして扱われていた²⁰。

木曜島における日本人数の急速な増加とその（よく知られる）島国根性は、島のヨーロッパ系オーストラリア人と行政府に相当な警戒をもたらした。1894年から1895年の日清戦争での勝利に対するいらだちと、南太平洋における日本人の志への恐れを抱かせたのである。日本人コミュニティと商業部門の指導者として、佐藤は（英豪の統制が開始して間もない地域における）日本帝国主義の拡大に対するオーストラリア人の相当な不安情勢のもとで、日本人在住者とオーストラリア行政府およびそのコミュニティとよい関係を保つための企ての困難さに直面した。佐藤は、大英帝国に対する連帯意識と支援を組織的に公的な場で示すことを通じて、日本人とオーストラリア人コミュニティとの円滑な関係を保持しようとした。そうした出来事の一つが、1897年6月のビクトリア女王の即位60周年式典への日本人の貢献であった。この7日間からなるスポーツ²¹と文化による祝祭の機会に、日本人コ

コミュニティは芸術学校で自由娯楽部門で出し物を公演した。*The Torres Strait Pilot* 週間新聞におけるある報告（論者不詳）では、次のように記述されている。

月曜の夜、島の日本人は芸術学校での自由娯楽部門で公演を行った。会場は満員で、ベランダまで熱狂した人々で一杯であった。和服着用による悲劇とお笑いの上演に続いて、手ごろな数の男優と女優によって11ほどの演目が、多かれ少なかれ優雅で美しく演じられた（1897年6月26日：第1面）。

この報告は、「女王に対する忠誠心を示した日本人の存在によって、元気づけられた」（前掲）と締めくくられる。

6月26日付 *The Torres Strait Pilot* の表紙に掲載された佐藤の説明では、この出し物が愛国的な目的で行われたことが強調されている。佐藤の親書は、日本人コミュニティの性質と忠誠について、英日関係の性質（あるいは、特にイギリスがそれらをどのように見られるかを好むか）とその特有の位置づけという性質とを関連づけながら、極めて正確に描写しようと企てたものと読み取れる。佐藤は、世界政治と文化におけるイギリスの役割に対する卑屈なほどの賛美に続けて、英日関係を「親切な母親」（ビクトリア／ブリタニア）と「よく愛され、ほどよい自制心をもった娘」（日本）と比喻した上で、次のように締めくくっている。

木曜島の日本人は、心から彼女の威厳に対する愛と敬愛を表しており、即位60周年記念式典での記念祭では純粋に心からの熱意を示した。彼らは、木曜島民として、この植民地における彼女の威厳に対する忠誠心あふれる臣民たる役割を与えられた、という宿命に満足している（前掲）。

佐藤の公式見解は、日本人コミュニティがトレス海峡において、豪英の権威とその愛国心の象徴を支持していると思われることで、その地位（実際には単に存在し続けること）を保持するために献呈されたものと拡大解釈できる。木曜島の日本人コミュニティの大多数は、オーストラリア政府による「白豪主義」の法制化である1901年の「移民制限条例」の拘束を免除（真珠貝採取産業の雇用者は除外）されたのだが、（人種差別主義者、保護貿易主義者の）論調は、明らかに木曜島における日本人コミュニティに壁として立ちはだかっていたのである。

この地域における大英帝国の権威に対する支持を主張しつづけるために、日本人コミュニティは1902年6月、ビクトリア女王の後継者であるエドワード王の戴冠式にちなむ別の祝祭を執り行った。宣伝用のチラシによれば、この機会のために地元商人の前芝夫妻によって「戴冠式（のため）に特別に創作された日本の大オペラ」「日本人役者の総出演による…歌、踊り、芝居…すべてが日本古来の様式による」というものが上演された。このジャンルに親しみのないことを強調せざるをえなかった *The Torres Strait Pilot* の論者（の誰か）は、詳細かつ目の高い論評を行っている。

大衆はチラシで、そのオペラが国王の戴冠式に敬意を払ってナエシバ〔訳注：ママ〕夫妻により特別に創作制作されたものであると知らされていた。しかし、われわれが日本のものへの知識が欠如しているため、その疑いもなく高度な日本文芸のもつ長所に対して、われわれの視座の範囲で熟考できないため…多くの日本人観衆の正しい評価が基準となるであろう。演者たちは、多様な登場人物のために、衣裳

の準備に大出費し、芸術的な技量を高めるために格闘したことは明らかだった。芸術学校の仮設舞台に配列された人工的な花は、観客を大いに喜ばせるのに効果的であった。実際、演目全体のひとつひとつの詳細は、日本人の生き方の立派で高貴な側面を例証するものであった。多様な役者は、好意的に受け入れられた。そして、何人もの観衆が紙に包んだ現金を最良の演者に向かって投げかけることで、何らかの新しいものへの賞賛が示された。グローバー氏は、2晩の間にこのようにして約50ポンドが演者に捧げられたと述べた²² (*The Torres Strait Pilot* 1902年7月5日、第1面)。

前芝夫妻の素性に関する詳細については不明であるが、その姓から判断すれば(少なくとも)夫側は和歌山県出身者の可能性がある²³。*The Torres Strait Pilot* の評論が正確であるならば、[訳注:大オペラという]名称の大きさにも関わらず、1902年に演じられた「日本の大オペラ」、およびこれに先立つ1897年の記念祭での「出し物」は、18世紀末から20世紀初頭にかけて日本で人気のあった「村芝居」に相当するものであったと考えられる。村芝居の形式は、「歌舞伎」²⁴(恐らく前述の「日本のオペラ」)に類似するもので、同じ物語の原典を用いて、地方のアマチュア役者がプロの三味線²⁵奏者と歌手、あるいはまた打楽器奏者を雇い、その伴奏とともに演じるものであった。上演費用は、通常地元商人が負担した。村人が大変魅惑され、その制作に莫大な時間とエネルギーが浪費されたことから、19世紀には地域および国家権力がさまざまな制限と鎮圧の対象とした。その舞台は、たとえば和歌山県の場合、トレス海峡に相当数の雇用人口を供出した紀伊半島の南東海岸部に密集していた。村芝居の演目には、道徳的啓蒙や「勸善懲悪」を主張する物語が含まれていた。この点において、1902年の木曜島における演目では、女王が物語りのなかで取り上げられたか、あるいは忠誠心を強調することで幕を閉じた可能性がある²⁶。

日本人コミュニティが提供した音楽的・劇的イベントは、公的に存在しようと企てていた彼ら自身の政治的な位置づけを文化的に複製し装飾したものであったと見なせる。1901年末、佐藤が日本に帰国したにもかかわらず²⁷、日本人コミュニティはこの地域におけるイギリス統治への支援を明白にする企てをやり続けた。冒険的な企てとして成功した別の事例として、1903年7月に3隻の日本の練習艦隊(海軍少将・上村彦之丞常備艦隊司令長官指揮)が「親善訪問」²⁸した際のことあげられる。艦隊の出発直後の *The Torres Strait Pilot* における巻頭記事(論者不詳)では、次のような論評で締めくくられている。

戦艦の日本人が示した親切心にまさるものはなく、彼らの訪問は長年よい思い出として残されるであろう(1903年7月11日、第1面)。

訪問を第一に成功させたものは、日本の海軍軍楽隊による演奏であった。前掲の記事では、適当なスペースを割いて、軍楽隊を褒め讃えている。

ここでは以前聴かれたことがない軍楽隊の演奏によって、訪問への関心はかなり高まった。このような音楽が聞かれることは、今後長らくないであろう(前掲)²⁹。

さらに、次のような詳細が記載されている。

極めて興味深いことに、地元の日本人倶楽部が、金曜と土曜の軍楽隊員の島内滞在費をすべて支払った。金曜日の夜、軍楽隊が7:30から演奏を開始し、10:00に《ゴッド・セイブ・ザ・キング》と日本の国歌で演目を締めくくるまで、クラブハウスには多くの居住者³⁰が後援していた（前掲）。

木曜島への軍楽隊訪問に際して、その役割、演奏、鑑賞が手際よく収束されたことで、佐藤が6年ほど前に示した英日関係への極めて正確な政治的描写がなされたのである。というのも、海軍軍楽隊の伝統とその音楽様式は、1800年代半ばから後半におけるイギリスのブラスバンド運動から引き継がれたものだったからである³¹。

この訪問は、日本人として佐藤が草案した別の対比を実証するものでもあった。

よい有力な海軍によって保持される偉大な力を知ること触発され、彼女〔訳注：日本〕はいつかは東のイングランドになって国際政治での役を担おうと確信した（The Torres Strait Pilot 1897年6月26日第1面）。

こうした海軍力は、1904-1905年における日露戦争での日本の勝利で即座に示され、それによってますます増強された。

日本の領域への力が増大するにつれて、オーストラリア人は地勢の不安定さを明瞭に感じ、同時に、日本が大英帝国と政治的に連携したことで、世界情勢は北半球でのみ配慮され、オーストラリアの南半球での孤立状態を知らしめることになり、複雑化した（Frei 1991:63）。

これは別の見方をすれば、日本がオーストラリア領土を領域化したいという「渴望」〔訳注：これをもっているというオーストラリア人による〕極度な無根拠の認識によって扇動されたもので、（1970年代日本の経済力拡大を恐れて再出したが）第二次世界大戦後、日本の軍事力が短縮されるまで主張された。

1905年オーストラリア上院は、先の1901年における移民条例について、非白人のオーストラリア上陸許可は、固定期間が終了し退去する契約者数と同数のみに限定するという、解釈修正を取り決めた。これは、数の上でも〔訳注：これまでの〕勧誘方法の柔軟さの上でも、日本人潜水夫に深刻な制限を与えた。この政策のひとつの結果として、レグ・ホッキング・アンド・ジェームズ・クラークが操業する真珠貝採取船隊は、木曜島を基地とするボートを半数にし、残りを木曜島から（国の条例適用範囲外の）オランダ領ニューギニアのアルーに移動した。これにより、島のさまざまなサービス産業は下降し、日本人潜水夫を地元産業の統制下に置き去り（ほとんど排除）にした³²。産業的圧力を収縮させるために、日本人潜水夫は1906年によりよい条件を求めてストライキを行い、雇用者からたくさんの譲歩を勝ち取った。この動きは成功したものの、日本人コミュニティの順応性と権力への敬意という（注意深く確立された）イメージに対して、深刻な影響を与えたように思われる。

1908年に行われた木曜島の真珠貝採取産業と経済への公的な調査では、島のヨーロッパ系オーストラリア人コミュニティの意見が聞かれた。日本人商人は、海外から商品の大部分を輸入し、日本人居

住者の顧客ほとんどを（うわさによれば強制的に）独占していると批判された。この結果、ヨーロッパ系オーストラリア人の中には反日感情が高まり、上述のような木曜島におけるかつての日本人コミュニティの文化的・政治的主導権はもろくも衰退し、日本人コミュニティは、夏の一時的な休業停泊期間に木曜島の日本人ゲストハウスへのみ上陸許可されたほかは、契約上ボートにとどまることを義務づけられ、シフト制の集団へと取って代わられた³³。

Ⅲ 「親密に結びついた」文化

上記で詳論した木曜島のコミュニティにおける日本人との戦略的な関与から少し離れるが、1880年から1910年にかけて木曜島の日本人にとっての（半）公式の音楽的娯楽は、日本人倶楽部建物内での時折の娯楽に限られていた。この建物は、コミュニティのなかで地位を確立した裕福な男性会員優先に利用された会議場であり、社交のほか祝祭場所として、またアマチュアによる寸劇や歌の不定期的な出し物が行われる場であった。ほかに、1920年代と1930年代時折日本人乗組員が娯楽を楽しんだ場所が、ロイヤルやグランドのような木曜島のホテル³⁴であった。第二次世界大戦以前には、これらの場所では生演奏は行われなかったようであったが、即興的な歌や蓄音機でのレコード演奏によって、日本人乗組員は英語のポピュラー音楽に親しんだ。たとえば、東寛は《イツ・ア・ロング・ウェイ・トゥー・ティッパラリィ》《マイ・ダーリン・クレメンティン》を聴いた（覚えた）とを想起している。

このような時折の娯楽とともに、日本人が音楽活動を行った第一の場所は、彼らが雇用されていたボートのデッキ上であった。ボートの乗組員はしばしば同じ村（あるいは近隣の村）出身者から構成されていたため、彼らは地元のコミュニティのアイデンティティと友愛を強めた。最初の10年間、トレス海峡の日本人雇用者の中で最もよく知られたボート上での音楽活動は、地元の歌や流行歌を無伴奏でうたうことであったようである。歌は、主に当時日本で流行していた浪曲³⁵、御詠歌³⁶、小唄³⁷のようなジャンルのものであった。1930年代においては、潜水夫の間で（しばしば不貞な情事に関する歌詞からなる）歌謡曲が人気を博したが、1931年の日本中国間の摩擦勃発とともに愛国的な軍歌がはやった。

1930年代半ばまでトレス海峡の日本人潜水夫に好まれた歌として何人かの情報提供者があげるのが、数え歌（俗称《ダイバーの歌》）という小唄である。この歌は、《万歳数え歌》という品行のおさまらない内容からなる日本の酒飲み歌³⁸を改作したものである。第二次世界大戦前の日本では、既存の歌の構造と旋律を新しい歌詞に適應させる改作方法は、ごくありふれたものであった。熟練潜水夫の滝本輝治（和歌山県すさみ町出身）が1970年代に記憶していたものは、潜水夫の望郷の思いと困難で危険な生活を描写するものである³⁹。

数え歌（俗称《ダイバーの歌》）

- 一つとせ 広い世界を 外国^{とくに}までも 出稼ぎに 行末の頼りは 唯手紙⁴⁰。
- 二つとせ 二人集まりゃ わが国で 金を欲しくば 外国に 行けよとばかりの うわさする。
- 三つとせ 見るに恋しき わが国の 古里^{ふるさと}離れて タースター [訳注：木曜島] に 来て見りゃ さほどのこともない。
- 四つとせ 夜はポンプを 廻さねど 寝ていて思うは 古里の 夢で話をするわいな。

- 五つとせ 五つ国 ^{ろくにく}六国の人はみな マニラ、マライに ショウシマン ビンガイみたよな 苦勞する。
 六つとせ 無理な言葉も いとわずに ダイバーおおせに 従いて 無理な仕事も せにゃならん。
 七つとせ 七月七日の 日曜は 以前と違うて 近年は 嫌でも仕事は せにゃならん。
 八つとせ 山も見えない 沖中で 風を頼りの 帆まい船 舟風なければ 帰られん。
 九つとせ 言葉はちゃんびょん まぜまぜで 何を言うやら わかりゃせん 返す言葉も あとや先⁴¹。
 十とせ 得心づくめで 来たなれど 一に波中 二に食事 三に言葉で苦勞する。
 十一とせ いつか日本の 波岸に ^{こゝろ}小褌からげて あがるやら それを思えば ほど遠い。
 十二とせ 日本出る時や 勇ましく 宝の山にも 登る気で 来て見りゃ 苦勞の針の山。
 十三とせ 散々苦勞は しておれど 末で三六 一八の 花を咲かしょと 思やこそ。
 十四とせ 死んで花見が 咲くでなし この花散らない そのうちに 早く日本へ 帰りたい。
 十五とせ 極楽地獄の境目で 目を取るの は ダイバーさん ほんに金儲けは 徒^たじゃない。
 十六とせ 論より証拠じゃ 皆さんよ やせた体で 色黒で 大抵わかるよ この苦勞。
 十七とせ 人のうわさに聞くわいな 小野小町じゃ ないけれど 色より食気で 苦勞する。
 十八とせ 早くシャエンが 切れたなら 国へ帰りて ^{かみ}筒親に 孝行つくそと 思やこそ。
 十九とせ ^{こゝろ}故国に残せし 親兄弟 私の帰りを 待つである はやく日本へ 帰りたい。
 二十とせ 人生わずかに 五十年 血氣盛りは 二十五歳 この花散らすな 外国で。

(小川 1976:158-160)

ダイバーの歌に関連づけられる孤独感や苦難にもかかわらず、数人の潜水夫たちは取引でかなりの収益がもたらされる経験をした。少なくともいくつかのボートでは、歌は成功した潜水夫が購入した三味線や尺八⁴²、ギター、バイオリンなどの伴奏付でうたわれた。すさみ町出身の岩田杉次に代表される何人かの潜水夫は歌がうまいことで知られ、その能力を同僚にたたえられた。一方、他のボートではほとんど演奏の手ほどきを受けたことのない潜水夫が、置き去りの楽器を奏でていた(たとえば、東寛は1930年代初期にミネルヴァ号に残されたそのような状況の三味線を思い起こしている [1999年のインタビューによる])。木曜島での定期的な休業停泊期間、これら楽器はしばしばゲストハウスに持ち込まれ、さまざまなボートの乗組員たちを巻き込む社会的な演奏会が行われた。

1920年代末からは、いくつかのボートの乗組員は蓄音機を入手し、レコード演奏が彼らの社会生活の上で重要なものとなった。1920年代末から1930年代にかけての日本のレコード産出によって、(既述の)歌謡曲が人気を呼んだ。レコードは、起業家が所有する木曜島-日本間定期航海船の乗組員(彼らは日本に戻ってレコードを購入し、帰りに手渡した)にその歌の題名を告げることで日本から入手した。田所鶴丸のように、300枚以上も所有していたとうわさされたレコード収集家の熟練潜水夫もいた。前述の楽器と同様、蓄音機やレコードも、木曜島での定期的な休業停泊期間ゲストハウスに持ち込まれた。1930年代半ばには、たくさんの木曜島のカフェでも蓄音機で日本の歌が再生され、客を惹きつけた⁴³。

1930年代トレス海峡での日本人就業者によるオリジナル曲が見当たらないのに対して、潜水夫の出発と仕事の脈絡に関する歌を創作した和歌山県在住者がいた。《^{となんまる}凶南丸をおくる歌》は、(トレス海峡ではなく)アラフラ海に直行した最初の船である凶南丸の出発に際して、串本町出雲地区の小学校教師・金田須美が作詞作曲した。その歌詞は次のとおりである。

《図南丸を送る歌》

1. 陸のいのちは 満蒙ぞ 海のまもりは アロー島 非常日本の 名を負いて 出雲の浦を船出する 雄々しの姿
図南丸
2. 四千哩を 突破する 行手は遠き アロー島 三十噸の 小舟に 紀州男の子の 意気高く 白銀の珠 拾うなる
3. 海図の上に あざやけく コンパスの線 引かれたり ボイラー焼けて エンジンの 調子揃いぬ ゴーヘッド
吹けよそよ風 追手風
4. いざ行け図南 アロー島 さかまく波浪 何のその アラフラ海に かがやける 潮の岬の 十勇士 ことほげ
今日の この門出

(小川 1976:231-232)

この歌は、[訳注：当時の]潜水夫出発に際する特別な脈絡を提供するものである。第一連目は、1931年に始まった日本と中国の摩擦の結果、日本の拡張論者が中国侵略を行ったことを政治的背景とし、この事件と商業開拓地のアロー（アロー）とアラフラ海とに結びつけている。この観点から、南の真珠貝採取地への出発は和歌山県の経済に利益をもたらすのみならず、愛国主義的な行為（この脈絡で出発する船員の価値が高められている）として表現されているのである。久原譲のように後に潜水夫となった者も含めて、1930年代には地元小学校の子ども達がこの歌を教わった。この歌は、和歌山県民がアラフラ海とトレス海峡の両者に参入する際の重要な動機づけを助長したのである。

IV. 歌の提示と交換

1920年代半ばから1930年代半ばにかけて、それまで独占に近かった日本の真珠貝採取船の就航が制圧された結果、戦争直前期にはトレス海峡民、アボリジニ、パプア人乗組員数が増加した。またこの制圧によって、トレス海峡民主体の乗組員を統制する船長として、日本人がナマコ採取漁や高瀬貝採取貿易にしばしばとして就業した。先にあげた《数え歌（ダイバーの歌）》に描かれる舟での辛い労働経験と、日本人船長と（多民族の）乗組員とのコミュニケーションの困難さは、当時のトレス海峡島民による歌の主題にもなっていた。これらは、ザ・ミルズ・シスターズやシーマン・ダンなど、今日のトレス海峡島民熟練歌手の演目には含まれていないが、元リンデマン島在住者〔訳注：オーストラリア北東海岸部のウィットサンデー諸島〕のラックラン・ニコルソンがそのうちの2曲を書き留めている⁴⁴。ニコルソンは、1930年代にリンデマン島に住み、彼の家族所有の小さなリゾート・ホテルではたくさんさんのトレス海峡島民が雇われていた。これら雇用者のうち数人が、以前舟で働いていた。ニコルソンは、モア島ポイド村出身のディッキー・ラハウが洗練された歌手兼踊り手であったと書き留めている⁴⁵。ポイド村には2曲、舟の労働に関わる歌が伝えられていた。その一つは、トレントン号でのベルウ・カイでのナマコ漁に向かう航海中の生活状況に関するものである。二つ目は、日本人船長の'l'の発音が'r'に聞こえる（これによって混乱が生じた）という日本人の有名な発音ミスを真似たこっけいな歌である⁴⁶。

また、異なる民族出身の乗組員メンバーたちが航海中の長期間接したことは、異なる音楽様式を異文化間で提示するための重要な状況をもたらした。たくさんさんの日本人潜水夫は、とりわけパプア人乗務員が船上の労働期間中いつもうたっていたと想起している。日本人、トレス海峡島民、パプア人乗

組員から構成された舟で1930年代に働いていたセイケ・ウキオ〔訳注：日本人かどうかは不詳〕がその一例をあげている。すなわち、1986年のインタビューに際して、彼は「とても迷信的な」パプア人が舟上でも伝統的な慣習を行い続けていたことを次のように述べている。

満月になると、彼らはデッキの上に椰子製の敷物を広げ、月か何かの祝い事のような踊りを始めた。彼らは、太鼓の代わりに缶詰の缶を叩いた。みんなが眠っている真夜中のことだった (Ganter 1988:49)。

船上での接触により、トレス海峡島民、パプア人、アボリジニも日本の歌を聞いた。何人かの乗組員はその曲目に無頓着であったが、期待どおりこの音楽は多様なものであった。ただし、すさみ町出身の堀本新一とその仲間の津村一二は、トレス海峡諸島民やパプア人乗組員が、日本人乗組員たちが死去した仲間との別れや自分たちの楽しみのためにうたった御詠歌に特別な興味（と敬意）を示したと想起している（1999年のインタビューによる）⁴⁷。また、久原譲は何人かのトレス海峡島民が木曜島のカフェで流された蓄音機のレコードを聴きながら、日本の流行歌を覚えようとして、コード進行や旋律をギターで辿っていたと思い起こしている（1999年のインタビューによる）。

これらの（主に非公式の）実践とともに、島民と日本人乗組員が意識的に演目を教えたり学んだ例もあった。東寛は、ジャック・モセビー⁴⁸という名前のヨーク島民と強い友好関係を築き、お互いに歌を教えあったことを思い起こしている⁴⁹。東は、1930年代に日本に帰国した後もヨーク島の1曲の歌を覚えていて、和歌山の老人クラブの会合で1990年代までは折あるごとにうたった（1999年のインタビューによる）。われわれが聞いた曲と東の説明とを敷衍すると、その南東風の季節の舟歌は、《ブラック・スワン》として今日知られる1930年代のトレス海峡島民乗組員に人気があった（あるいはそれに関係する）ものだと推察される⁵²。

上記で議論した場合に加えて、1970年代と1980年代にトレス海峡を訪れた何人かの日本人研究者がトレス海峡島民が日本の歌を同化していたことに関する証拠を掌握している。これらの研究者は、日本の歌の片鱗を思い出してうたった年配の居住者に遭遇しているのである。たとえば、畑道也は1917年生まれで1970年代にはヤム島に居住していたパトリック・タイダイが（畑はわれわれがインタビューした時点では、どの歌であるかは同定できなかったが）彼の知っている日本の歌を少しうたったのを記憶している。彼はまた、他の（名前を知らない）島民が《小唄（ダイバーの歌）》を正確にうたったのを記憶している（1999年11月、小川博司、ヘイワード、小西によるインタビューによる）。第二次世界大戦に先立って日本人潜水夫と乗組員がトレス海峡で就業していた頃からの相当な時間経過により、トレス海峡島民に幅広く親しまれた日本の歌については、調査しきれなかったものと推察される。

歌とともに踊りもまた、重要な異文化間コミュニケーションの一部をなした。東および他の潜水夫たちは、しばしば訪問先の島の祭に参加した。こうした訪問は、しばしば退屈で困難な性質をもつ真珠貝・高瀬貝採取やナマコ漁の気晴らしとして、歓迎されたようである。このようなイベントでは、ほとんどの潜水夫たちが鑑賞者であったようだが、津村と堀本は、和歌山県串本町出雲地区出身の特定の日本人乗組員が、さまざまな島を習慣的に訪問して歌と踊りを覚えていたと想起している。フェルトン号の乗務員であった串本町出雲地区出身の久原譲は、同僚がバドゥー、ボイグ、エラブ、メール、サイバイ各島などで伝統的な島の踊りに参加したことを思い起こし、これを裏付けている。彼は、

この活動要因として次の二つをあげる。第一に、乗組員が踊りに参加して特別に楽しめたかったこと、第二に浅い水域で操業していた舟に比べて、フェルトン号の乗組員は水圧変化からの回復により時間を要する深い海域で操業していたこと〔訳注：そのため上陸中は身体を動かした方がよいという健康上の理由〕をあげている（1999年のインタビューによる）。彼は、参加した乗組員たちは島の踊り手に歓迎され、大変楽しかったと思いつき起している（前掲）。

フェルトン号乗組員がトレス海峡島民の踊りを享受したことは、太平洋戦争への日本参戦から日本への帰還に至る4年間のオーストラリアにおける抑留生活を生き延びるためにも、強い効力を発した。1947年ないし1948年⁵³、乗組員たちは地元串本町（和歌山県）の娯楽コンテストに参加し、メール島で覚えた歌と振り付けのパフォーマンスで2等賞を獲得した⁵⁴。このとき、彼らは腰巻の周りに貝のガラガラを結びつけた衣装をまとい、炭で顔と身体を黒く塗った。この化粧と衣装は、(西洋の「黒い顔」の minstrel・ショーに典型的である風刺ではなく)それを正統に見せかけるための試みとして、取り入れられた。この点において、熟練の潜水夫による踊りのパフォーマンスは、出雲地区の乗組員が郷愁の思いを抱きながら、過ぎ去った日々を喜び惜んで、過去と「再結合」したものである⁵⁵。

結び

本論では、1890年から1941年の木曜島における日本人の音楽文化について、3つの側面から記述してきた。すなわち、島の一般聴衆への（比較的短期間の）日本文化の公開実演、日本人コミュニティ内部での音楽文化、1930年代における日本人とトレス諸島島民との音楽的相互作用である。後者の重要性は、論じるに値するものである。

口承という意味でも音楽性からいっても、取るに足りない（それゆえ継続性に欠ける）音楽による異文化間コミュニケーションの場合、しばしばその影響力やあるいは今日のレパートリー（ないしシリンドラー、ディスク、シート音楽その他の機械的録音）における継続的な存在という観点から、その歴史的重要性が判断される。こうした点から判断すると、これまで記述してきた現象はほとんど重要ではない。しかしながら、そのように判断することは、それら（偶発的に）存在するに過ぎないものを特権化されたがゆえ受容されたがごとく見なしてしまう歴史的偏見を引き起こさせる。

本章で提示してきた現象は、それらの尋常ならぬ継続性と複雑さ、相反性という点で注目される。日本人乗組員の間には、トレス海峡での就業時から今日に至るまでどのような型の混合が起こったかを熟考することも可能であるが、第4節で記述した歴史は生きた文化的経験であった点で第一義的に重要である。これまで記述してきた音楽活動は、日本およびトレス海峡いずれにおいても、それらに続く音楽文化や曲目に重要な影響を与えなかったが、それらが上演されたことは、トレス海峡や日豪の文化関係一般において、音楽史上の重要なエピソードを構成しているのである。日本人とトレス海峡諸島民は、相互に言語知識を欠き、歌のモードと旋律には明らかな違いがあったにもかかわらず、曲の提示と交換を行ったことは、異文化コミュニケーションと理解、情緒的な絆を示す注目すべき例だといえる。今日の西洋における「ワールドミュージック」市場では、販売促進のために具体化されたエキゾチックな「他者」の音楽が消費されているのとは対照的に、日本人と地元原住民とのお互いの音

楽への知識は、自発的に文化的脈絡化されたものだったのである。

謝辞

フィールドインタビューの準備にご助力いただき、また当日同行までしていただいた小川博司氏に感謝の念を表す。また、さまざまなかたちで本調査に協力していただいた方々、たとえばレジーナ・ガンター、管光、久原脩司、宮西桐子、スティーヴ・モリンス、仲万美子、カール・ノイエンフェルド、松本博之、谷村政次郎、塩津洋子、畑道也の各氏ほか、お名前を明記できなかった方々、さらに和歌山県の熟練潜水夫へのインタビューをコーディネートしてくださった古田耕次、岡崎ケイシ各氏、そしてもちろん、われわれの分析に光を照らすコメントや意見をいただいた東寛、久原譲、津村一二、堀本新一の熟練潜水夫諸氏に心から感謝したい。

[フィリップ・ヘイワードの本論に関わる作業は、1999年11月から12月にかけての関西大学社会学部来訪研究助成の一部で遂行された。この間の関西大学の支援に対して、感謝する次第である。]

引用文献

- Clifford, J (1997) *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Cambridge (USA): Harvard University Press.
- Foley, J (1991) *Timeless Isle: An Illustrated History of Thursday Island* (3rd edition with photographic supplement), Thursday Island: Thursday Island Historical Society.
- Frei, H (1991) *Japan's Southward Advance and Australia: From the Sixteenth Century to World War II*, Melbourne: Melbourne University Press.
- 楽水会編 (1984) 『海軍軍楽隊—日本洋楽史の原典—』, 東京: 国書刊行会.
- Ganter, R (1988) *The Japanese Experience of North Queensland's Mother of Pearl Industry* (Unpublished report submitted to the Great Barrier Reef Marine Park Authority).
- (1994) *The Pearl Shellers of Torres Strait: Resource Use, Development and Decline, 1860s-1960s*, Melbourne: Melbourne University Press.
- (1999) 'The Wakayaman Triangle: Japanese Heritage of North Australia', *Journal of Australian Studies* 61:55-63.
- 服部徹 (1894) 『南球の新殖民』, 東京: 博聞社.
- Hayward, P (2001) *Tide Lines- Music, Tourism and Cultural Transition in the Whitsunday Islands (and adjacent coast) (1840-2000)*, Lismore (Australia): Music Archive for the Pacific Press.
- 平野健次ほか監修 (1989) 『日本音楽大事典』, 東京: 平凡社.
- Hosokawa, S (1999) 'Soy Sauce Music: Haruomi Hosono and Japanese Self-Orientalism', in Hayward, P (ed) *Widening the Horizon: Exoticism in Post-War Popular Music*, Sydney: John Libby & Co. / Perfect Beat Publications.
- 久原脩二 (1954) 「真珠貝採取出稼の研究: アラフラ海・壕州方面」(和歌山大学教育学部卒業論文、未刊行).

- (1999) 「日本人のオーストラリアにおける漁業移民の研究」(9月30日、古座・古座川地区教育相互会総会での発表レジュメ、未刊行)。
- Lack, C (1960) 'Cape York Peninsula—Land of Romance', *North Australian Monthly*, October.
- 守屋毅 (1988) 『村芝居—近世文化史の裾野から』, 東京: 平凡社.
- Mullins, S (1995) *Torres Strait: A History of Colonial Occupation and Culture Contact 1864-1897*, Rockhampton (Australia): Central Queensland University Press.
- 仲井幸二郎ほか編 (1972) 『日本民謡辞典』, 東京: 東京堂出版.
- 小川平 (1976) 『アラフラ海の真珠』, 東京: あゆみ出版.
- Patterson, A. B. (1902) 'Thirsty Island' and 'Pearl Industry at Thursday Island', reprinted in Semmler, C (ed) (1992) *A. B. 'Banjo' Patterson*, Brisbane: University of Queensland Press.
- Reid, F (1954) *The Romance of the Great Barrier Reef*, Sydney: Angus and Robertson.

-
- 1 「木曜島」とは、「Thursday Island」の日本語名(文字通りの翻訳)であり、日本でもこの名称が用いられている。「音楽」とは、「music」をさす日本の用語である。なお、翻訳にあたっては、必要に応じて〔訳注:〕を加えた。
 - 2 当該時期にこの地域で就労した日本人の多くは、短期契約労働者として雇用されたため、ここでの「コミュニティ」という用語は、より広義に用いる。すなわち、社会的・経済的な中心である長期在住者の周囲に、小さな核となる仲介役を介して短期訪問者が集結していた状況を表す意味も含む。
 - 3 初めは *The Tottes Strait Daily Pilot* と *New Guinea Gazette* という名称であったが、後に *The Torres Strait Daily Pilot* として併合された(残念ながら、全巻は存在しないもようである)。
 - 4 Foley (1991)、Frei (1991)、Ganter (1994) などをさす。
 - 5 東寛^{ひがしゆたか} (1913年生、那智勝浦町宇久井出身)、久原譲^{くはらゆずる} (1920年生、串本町出雲出身)、津村一二^{かずじ} (1915年生、すさみ町大関出身)、堀本新一 (1912年生まれ、すさみ町堀切出身) 各氏へのインタビューを行った。
 - 6 ただし鎖国期間中、南方の琉球諸島は中国貿易の「裏口」役を果たし、また長崎の出島港では、中国およびオランダとの(制限つき)貿易と通信が許可されていた。
 - 7 1860年代末から、日本人水夫はオーストラリア北東部水域で操業した外国船に乗り込み、その地域と水産資源に関する知識を得ていた。
 - 8 移管に関する議論については、Mullins (1995:139-145) 参照。
 - 9 Ganter (1994:101) は、野波の木曜島上陸を1876年としている。これを裏付ける詳細がないため、ここでは Frei による年代による。
 - 10 カラクキサンとは、特に売春目的で海外渡航した女性をさす日本の用語である。1890年代の半ば、日本人女性をおいた日本人所有の売春宿は、オーストラリア主要港すべて(木曜島、ダーウィン、フリーマントル、ウィンドハム、コサック)にあり、日本人水夫が訪れた。オーストラリアにおけるカラクキサンの先行研究についての議論は、Ganter (1999:56) 参照。
 - 11 日本人倶楽部創設者には、幅広い能力と文化的経験を有する個人が含まれていた。たとえば、和歌山県出身の石原網蔵(1855年生)は、渡航前、串本町の小学校長を務めるかわら自己流で英語を学んだ。兵庫出身の中川六三郎(生年不明)は、並以上の英語と漢文の教育を受け、木曜島では雑

貨商として成功した。田口亀太郎（1858年生）は、長崎のカプリ神学校で学び2年間香港と中国で過ごした後、木曜島に移住した。小峯磯吉（1856年生）は、朝鮮と中国において実業家としての経験があった。長崎出身の長濱常治（1852年生）は、もと造船工場経営者であった。他にも、岡崎興之助（1856年生）のように警察官をやめて、香港、シンガポール、ダーウィンで働いた経験者がいた（服部 1894：16）。

- 12 英語版のいくつかの資料では、彼の名前を Satow と記しているが、本論では Sato と記した〔訳注：英語版で引用される日本人氏名は、引用文献としてあげた日本語の文献と照合しながら同定できる漢字表記した。また、難読のものについては適宜ルビをうった〕。
- 13 女性の氏名は特定できなかったが、東京女学校出身者であるとわかった。
- 14 この時期、多くの日本人観察者がこの地域に多くの機会があることを大々的に肯定した。たとえば、1894年服部徹は『南球之新殖民』と題する小冊を出版し、1890年代初期木曜島に居住した友人の松岡氏が提供したという情報を引用している。このなかで、服部は木曜島における日本人入植者の増大について熱烈に言及している（この時期のオーストラリアー太平洋地域における日本人の大意〔訳注：いわゆる「南進論」〕に関する詳論は、Frei [1995:31-74] 参照）。
- 15 1897年から1898年の *The Torres Strait Daily Pilot* と *New Guinea Gazette* に掲載された、佐藤の事業に関する広告からの引用。
- 16 組織的な勧誘の結果、日本人雇用者は1895年から1900年にかけて、トレス海峡で就業する潜水夫組合員の50%を、また1900年から1905年にかけてその65%ほどを占めるに至った（『木曜島真珠貝およびナマコ漁調査報告』、1885-1914年による）。
- 17 長崎県（22人）、広島県（15人）出身者が、これに次いだ。
- 18 和歌山県串本町大島の日米修交記念館には、この遭遇を記念する小さな展示がある。
- 19 地元人口における日本人の傑出は、ハリケーンによる死者174人のうち日本人が65人であった、という1899年5月13日付 *The Torres Strait Pilot* 紙の記事にも示唆されている。
- 20 オーストラリアの詩人兼ジャーナリストのA. B. 「バンジョー」・パターソンは、1902年に木曜島を訪問し、1902年5月17日付 *Sydney Mail* 紙にトレス海峡における真珠貝貿易とそこへの日本人参入について報告している。また彼は、1902年4月5日付 *Bulletin* 紙で、木曜島における飲酒文化に関して「渴望の島」と題する記事を書いている。この記事には、空気栓を遮断して仲間を殺害しようとしたとされる日本人潜水夫に関する議論も含まれている。この出来事に触発されたパターソンは、カンゾウ・マカメという架空の日本人潜水夫の死を詳細に述べた「パール・ダイバー」という詩を創作した。
- 21 日本人参加者のためのイベントには、「日本のレスリング」（恐らく相撲）や「一本の棒」（恐らく剣道）が含まれていた（*The Torres Strait Pilot* 1897年6月5日、論者不明）。
- 22 その報告は、この現金は Quetta (Anglican) Parish Institute に寄附されたと付け加えている。
- 23 〔訳注：前芝という地名は愛知県豊橋市の漁業地域にあるが〕和歌山県串本町には、前芝商店という名前の店が現存している。
- 24 音楽、舞踊、演劇が組み合わされ、しばしば豪華な舞台上で演じられる17世紀日本で発展したもの（詳細は、平野他 1989 参照）。
- 25 三弦からなるフレットのないバンジョー状の楽器で、猫（あるいは犬）の皮を共鳴胴に張りつけ撥で演奏する。

- 26 村芝居に関する情報は、守屋 (1988:36-204) 参照のこと。
- 27 日本に帰国してから、佐藤は日本人倶楽部の会員として選出され、政治的な経歴を築きつづけた。
- 28 横須賀を出港した松島、巖島、橋立の練習艦隊は香港、シンガポール、バタヴィアを訪問した後、木曜島訪問に先立って、オーストラリア全域の海岸部を主要な港に停泊しながら巡航し、アンボン、マニラ、その他さまざまなアジアの港を経由して帰航した。
- 29 この描写は、1903年10月3日付 *The Torres Strait Pilot* に掲載された「彼らはあなた方に日本の軍楽隊を思い出させるであろう…それは、悪いものでなかった…」(前掲) という観察者のコメントを引用し、ローカルな軍楽隊によって成し遂げられた発展を肯定した報告から生まれた。
- 30 ここでは、ヨーロッパ系オーストラリア人をさすと思われる。
- 31 日本の軍楽隊による初の公開演奏は、1870年横浜で行われた (イギリス) 第10連隊 (1864年以来横浜に駐留していた) の第一大隊軍楽隊との合同によるものであった。イギリス軍楽隊長ジョン・ウィリアム・フェントンの訓練を受けた30人の (現) 鹿児島県出身の軍楽傳習生は、吹奏楽器の指導と練習開始からたった40日後にこれを行った (楽水会 1984:8-10)。
- 32 操業船のオランダ領ニューギニアへの移動とともに、多くの日本人潜水夫も移動し、その後日本人潜水夫の多くはアルーに直接勧誘された。
- 33 例年、風向きの変化によって操業困難となるため、休業をよぎなくされた。
- 34 久原譲は、日本人潜水夫が1930年代にはホテルによく現れる魅力的な女性を目当てにグランド・ホテルを好んで訪れたことを思い出した。そのため、彼らはそこを「美人ホテル」と呼んでいた (1999年のインタビューによる)。
- 35 「浪花節」とも呼ばれる「浪曲」は、一般大衆の生活の側面を扱った滑稽で風刺的な朗唱のジャンルである。当初は路上で広まったが、1880年代に出現した音楽ホールで浪曲師が演奏するようになった。1909年の日本への蓄音機導入までに、これは初期のレコード販売数の20%を占めるほど人気を呼んだ (詳細は、平野他 [1989]「浪曲」参照)。
- 36 16世紀に生じた歌のジャンルで、仏教信徒の巡礼歌として用いられた (詳細は、平野他 [1989]「御詠歌」参照)。
- 37 1910年あたりに現れた3~4分の長さの歌で、1930年代までに人気が出た。この歌は、民謡 (地元のフォークソング)、俗曲 (三味線を伴う流行歌)、はやり歌 (流行歌) のジャンルに属する。小唄は、劇場でのバラエティ・ショーで人気を呼び、後に蓄音機のレコードで広まった (詳細は、平野他 [1989]「小唄」参照)。
- 38 この歌は1842年直後に創作され、当時は端唄とよばれる無伴奏の流行歌のジャンルに属していたが、1880年代以後、小唄として知られるようになった (この歌とこのジャンルに関しては、平野他 [1989]「小唄」参照)。
- 39 日本語のオリジナルでは、一連が41シラブル (5 + 7 + 5 + 7 + 5 + 7 + 5) からなりたっており、それはしばしば日本語会話での用法を凝縮ないし修正するための文法的な構造を要するものである。ここでの翻訳は、それゆえ必然的に意識となっている [訳注：原著では、小西による英訳版を掲載した]。
- 40 こうした手紙は、潜水夫をトレス海峡まで連れ出すための交通手段の確保や一時滞在の手配に必要であった。
- 41 これは、英語、日本語、ビジン語あるいはトレス島の言語を混ぜ合わせてコミュニケーションす

- ることの困難さを語るものようである。
- 42 5孔からなる竹製縦笛の一種。
- 43 久原は、(恐らく、当時の日本と中国との摩擦に起因したのであろうが) 中国人のカフェ店主は日本のレコードをかけなかったが、混血ないし木曜島民のカフェ店主はリクエストに応じていたという(1999年のインタビューによる)。
- 44 これらは、未完成の手稿として記録されており、息子のロイ・ニコルソンがそれを保有している。
- 45 ウィットサンデー島嶼におけるトレス島民の音楽についての詳細は、Hayward (2001) 参照のこと。
- 46 ニコルソンの説明には、正確な歌詞や旋律は含まれていない。
- 47 和歌山県出身の潜水夫たちは、県内に主要な参道〔訳注：熊野街道〕があることから、このジャンルに親しみがあるのかも知れない。
- 48 1870年代にヨーク島に移住したボストン出身のアメリカ人水夫ネッド・モセビーは、ナマコ漁を行い、トレス海峡島民の女性と結婚した。ジャック・モセビーとは、ネッド・モセビーの息子かも知れない(それがゆえ、アメリカ人とトレス海峡島民の混血である)。この仮説は、モセビーには4人の息子(名前不詳)がおり、それぞれが1930年代に舟を所有し、「ナマコ、高瀬貝、真珠貝販売で富を築いた」という Reid (1954) の記述によって支持されるものである(同: 154)。
- 48 1999年にインタビューを行った際、東はモセビーからどの歌を学んだか正確に覚えていなかったが、それらは伝統的な子どもの歌であったと確信していた。
- 50 われわれがインタビューをしている間に、彼はメル島で覚えたという2番目の歌の断片もうたったが、それに関する詳細は不明であった。
- 51 東は、1980年代(詳細不詳)に毎日放送のテレビ局から、トレス海峡熟練潜水夫のドキュメンタリー番組制作のためにインタビューされ、その番組プロデューサーが彼の歌の録音をトレス海峡島民に聞かせたところ、その歌が同定されたという(われわれは、そのドキュメンタリー番組の複製や正確なタイトルを入手できなかった。なおこれに関しては、他の情報提供者からも言及された)。
- 52 また、たとえばオーストラリアのクルーザー操縦士ブルース・ジェミーソンは、1930年代にウィット・サンデー諸島で従事していたトレス海峡島民乗組員によるこの歌(彼はその題名を《ラガー・イン・ザ・ストロング・サウス・イースター》と述べていた)のパフォーマンスを思い起こしている(1994年オーストラリア、ニュー・サウス・ウェールズにおけるハイワードとポイント・クラールによるインタビュー)。
- 53 久原は正確な年を覚えていなかったため、どちらが正確であるか不明である。
- 54 久原はそれを演じたときには歌の正確な意味を知っていたが、(50年以上経った後)われわれがインタビューしたときには思い出すことができなかった。
- 55 われわれのインタビューで、久原はトレス海峡島民を解雇したくなかったことを強調し、(国際的な摩擦が起こるまでは)そこに永住することも考えた述べた。